

「小樽市子どもの読書活動推進計画(案)」に対して提出された意見等の概要及び市の考え方等

1 意見等の提出者数	2 人
2 意見等の件数	24 件
3 上記2のうち計画等の案を修正した件数	1 件
4 意見等の概要及び市の考え方等	

No.	意見等の概要	市の考え方等
1	(第1章 計画の策定に当たって) そもそも、この計画が指す「本」とは何か。また、ジャンルも考慮しないと、反社会的な思想を持つたりにしないのか。厳格な定義まではしないまでも、ある程度、計画の中で「本」の定義をしておいた方がよい。	子どもたちが成長していく上で、様々な分野に興味関心を持ち、生きる力を育くむためには、多様なジャンルの本に触れていくことが大切であると考えます。 そのため、計画の中では本の定義をするのではなく、子どもの読書に関わる大人が子どもの声も聞きつつ、子どもの読書環境を整備していくことが必要であると考えております。
2	(第1章 計画の策定に当たって) 計画には、なぜ読書が嫌いなのかと言う視点からの考察がない。読書離れを問題にするならば、その原因を究明しないと解決しない。読書活動を推進するためには、その人にあった方法で行った方がよい。すべての児童に授業で感想文書きを強制するような画一的な方法は、むしろ嫌いになる可能性もあると言う点で避けた方がよい。きちんと1人1人の子どもと個別に向き合い、多種多様な方法の中から、その子どもにあった方法で読書習慣を育てると言う視点が計画にあって欲しい。	アンケートの結果から導き出された、本が嫌い、もしくは好きではない、と回答した子どもが、学齢期の各段階でそれぞれ3割近くもいるということについては、改めてその事実を課題として認識したところであります。 こうした課題に対し、これまで具体的な施策は位置付けておりませんが、この計画の策定によって、従来の取組も含めた評価を行い、ご意見のように不足があるとされたものについては、検証と分析を行い、より効果的な課題の解決に向けて取り組むことといたします。
3	(第1章 計画の策定に当たって 1 計画の趣旨) 計画策定の趣旨において読書活動推進の狙いあるいは目的が明確でない。コミュニケーション能力を高めること、社会性を身につけることが記載されているが、これは読書活動の本質的な目標とは思えない。子どもの読書活動の推進に関する法律の第2条に「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものとし」とあり、これを目的とするのが原文より適切かと思う。	「1.計画策定の趣旨」における読書活動の推進の目的については、記述している表現は異なりますが、法文の趣旨が本文中に包含されていると考えることから、案のとおりといたします。
4	(第1章 計画の策定に当たって 2 子どもの読書に関する国・北海道の動向) 子どもの読書に関する国・北海道の動向において本計画の位置付けが図にて示されているが、小樽市の本計画が図にはない。小樽市自殺対策計画(素案)頁2に示される図のイメージのように表現した方がよいかと考える。	本計画は国の「子どもの読書活動の推進に関する法律」を根拠とし、北海道と同様、当市においても計画を策定するものです。 図につきましては、そのような考えを示したものとなっており、案のとおりといたします。
5	(第1章 計画の策定に当たって 2 子どもの読書に関する国・北海道の動向) 本計画は北海道子どもの読書推進計画(第4次計画)に留まっていると判断できる。そうであれば図、文面でその旨を記載すべきである。尚、北海道子どもの書推進計画(第4次計画)においては基本理念「自主的に読書活動を行うことができるよう、家庭・地域・学校等の連携を進め、積極的にその環境整備を図ります」とある。	国の「子どもの読書活動の推進に関する法律」の第9条にあるように、当市においても子どもの読書活動の整備を図り、子どもに読書の楽しさを伝え、読書習慣を付けるために、本計画を策定するもので、案のとおりといたします。
6	(第1章 計画の策定に当たって 2 子どもの読書に関する国・北海道の動向) 本計画は北海道子どもの読書推進計画(第4次計画)に示される環境整備に留まらず、読書活動が推進しない本質に迫る施策を盛り込んだ計画とすべきである。	本計画の各取組を進めていくことにより、子どもたちに読書の魅力を伝えてまいりたいと存じます。

No.	意見等の概要	市の考え方等
7	<p>(第1章 計画の策定に当たって 2 子どもの読書に関する国・北海道の動向) 北海道子どもの読書推進計画(第4次計画)は平成29年3月に定められていると記載されているが、平成30年3月策定の間違いではないか。北海道のホームページにて確認している。</p>	<p>ご指摘のとおり、「平成29年3月」を、「平成30年3月」に修正いたします。</p>
8	<p>(第1章 計画の策定に当たって 3 計画の期間) 5年後の2023年に見直すところがあるが、北海道子どもの読書推進計画(第4次計画)は平成34年(2022年)までとなっており、北海道の次期計画と同期を取った方がよいと考える。また、前期5年・後期5年で計画をブラッシュアップするのではなく、3年サイクルで高度化していくような計画が適切なPDCAになるかと考える。以上から次のような3段階の計画を提案する。</p> <p>(A) 前期2019～2022読書環境整備、北海道子どもの読書推進計画(第4次計画)に対応する (B) 中期2023～2025読書推進の具体的な新施策の実行、北海道次期計画に対応する (C) 後期2026～2028中期で実施した施策の評価によりさらに新施策を実行する</p>	<p>小樽市総合計画同様、子どもの読書活動については長期的な展望のもと推進していきたいと存じます。その中で、前期・後期に分け、中間年において振り返り、評価を行いたいと存じます。 ご提案につきましては、今後計画を進め、評価を行う上で参考とさせていただきます。</p>
9	<p>(第1章 計画の策定に当たって 4 計画の対象) 本計画の対象は子どもになっているが、社会人や高齢者も対象に含めた方がよい。子どもは大人を見て育つというが、子ども達の集団の価値観はその時の社会の価値観に大きく影響されているように見える。読書の価値をよく理解しない人たちが子どもに本を読めと言っても通じないと思う。読書が素晴らしいことを我々が実践し示す事ができるような環境の整備を行って欲しい。</p>	<p>ご指摘のとおり、まずは周囲の大人が読書の魅力を知り、自ら読書を実践する姿を見せ、読書の大切さを子どもたちに伝えていく必要があると考えております。 本計画における「子ども」につきましてはおおむね18歳(高校生期)を指しますが、家庭・地域、幼稚園・保育所、学校、図書館等の子どもの読書活動と関わりのある市民や団体も対象としており、これは市民全体を含んでおり、社会全体で読書の推進を図っていくことを目指しております。 本計画によって読書に関する様々な取組や情報の周知に努め、社会全体の意識の向上を図り、未来を担う子どもたちの読書の推進に努めてまいります。</p>
10	<p>(第1章 計画の策定に当たって 4 計画の対象) 原案では18歳までが対象となっている。読書活動が推進する要素として家庭環境があることが本計画においても触れられている。つまり、親・兄妹が読書をし、図書が家庭にあることが子どもの読書を推進しやすいということである。よって間接的には子どもを有する親も計画の対象とすべきと考える。</p>	<p>本計画における「子ども」につきましてはおおむね18歳(高校生期)を指しますが、家庭・地域、幼稚園・保育所、学校、図書館等の子どもの読書活動と関わりのある市民や団体も対象としており、これは保護者も含んでおります。子どもやその周囲を取り巻く大人に対し、読書の大切さ、楽しさを伝え、社会全体で読書活動の推進を図ってまいります。</p>
11	<p>(第2章 本市の子どもの読書活動の現状と課題 2 アンケート) アンケートについては母数、配布枚数、回収率などからアンケート結果の有効性について統計的な手法を持って示してほしい。尚、18歳以下の人口は小樽市統計書から約15,000人程度と想定され許容誤差5%であれば十分な配布枚数であることは確認している。</p>	<p>アンケートの調査方法と回収結果につきましては資料編にてお示ししましたとおり、小樽市内各6地区から集計し、児童生徒からのアンケート回収率も全体として95.0%と高く、計画策定におきまして有効なものと考えております。</p>
12	<p>(第2章 本市の子どもの読書活動の現状と課題 2 アンケート) 親へのアンケートの回答の大半が母親であることについて、子ども時代に読書をすべきである重要性は社会人になって長文の専門書を理解する、長文にて社内文書あるいはお客様への提案書を作成する等の場面で痛感するものである。そういう業務に携わる可能性の高い父親の意見などを収集する工夫が次期計画策定時には必要と考える。</p>	<p>アンケートにつきましては、本計画策定に当たり、子どもの読書活動の実態について把握することが調査目的であります。 したがって、保護者の方のご意見につきましては、具体的な取組を進めていく中で、収集に努めてまいりたいと存じます。</p>

No.	意見等の概要	市の考え方等
13	(第4章 子どもの読書活動推進のための方策) 第3定例及び予算委員会では子どもの基礎学力低下理由のひとつとして、TV・ビデオ観賞、インターネットサーフィン、ゲームなどの娯楽に時間を割当て、勉強時間が十分確保されていないことが挙げられていた。この状況からいかにして読書に時間を割り当てるか具体的な施策が必要である。スポーツ活動に時間を割当てる傾向は中学・高校生には高まるので、やはり国語の授業のなかでの工夫が必要かと考える。	いただいたご意見は、具体的な事業や取組の方向性を示していると解されますので、子どもの読書活動のための具体的な事業実施の中で検討してまいりたいと存じます。
14	(第4章 子どもの読書活動推進のための方策) 子どもへの教育に関して「分かりやすい」が小樽市でも重要視されていると認識している。読書にこの「分かりやすい」を適用すると、年齢の他に子どもごとに興味を持つ適切なテーマに対応したコンテンツ(図書)を、いかに学校含む教育側が両親・本人に提供できるかが重要と考える。学年ごとに推奨図書を示し読書感想文の執筆を強要するような手法は読書の狙いから再考すべきである。読書感想あるいは意見について否定的な見解が先生・生徒仲間から提示されるとか、「感想」を採点するなどは読書が嫌いになる要素のひとつかと思う。	ご指摘のとおり各発達段階において、本の内容がわかりやすいかどうか、興味関心を持つかどうかは読書推進の上で重要であると考えます。それを踏まえた上で選書を行い、図書の充実を図り、魅力的な読書環境作りに努めてまいります。 また、こうした図書についての情報提供や具体的な事業実施を通じて、子どもたちに読書の楽しさを伝え、自主的な読書の習慣付けに努めてまいりたいと考えております。 ご意見につきましては、今後の取組を考えていく上で参考とさせていただきます。
15	(第4章 子どもの読書活動推進のための方策) 情報伝達の視点では文字<文字+音声<文字+音声+表情などが科学的に証明されている。つまりメール、電話よりは相手と直接会って会話をするとか、読書よりは映画など動画のほうが正しく事実を伝達しやすいということである。そういう状況のなか、子どもたちにあえて読書を薦める強い理由を明確にしないと、子どもたちは自主的に読書をしないうであろう。両親への説明についても同様で、文章(長文)で自己主張ができ、さらに相手を説得する(納得させる)ようなことが指標となるような施策が必要かと考える。国語の授業の中で取り組むべきと考える。学年によっては長文ではなく2～3の箇条書きで表現することでもよい。	本計画の取組を通じて、読書環境整備と読書の機会を増やしていく中で子どもたちに読書の良さ、楽しさを伝え、読書意欲の向上を図り、自主的な読書につなげてまいりたいと存じます。 いただいたご意見は、具体的な事業や取組の方向性を示していると解されますので、子どもの読書活動のための具体的な事業実施の中で検討してまいりたいと考えております。
16	(第4章 子どもの読書活動推進のための方策 基本方針3 施策1) 親が読書を行い家庭に図書がある程度存在することが重要である。これを支援する施策を追加すべきと考える。	アンケート調査の結果から、読書が好きになったきっかけとして「家に本があった」ことが、回答の上位となっており、読書環境の重要性を改めて認識した次第です。 したがって、保護者を含め、子どもを取り巻く周囲の大人に読書の大切さを伝える啓発活動等、様々な取組を実施し、地域の読書環境の充実を図ってまいりたいと存じます。
17	(取組・事業一覧) 図書委員会活動の推進が小学生期と中学・高校生期に掲載されるが、活動内容が具体的でないの効果が不明、生徒の参加可否が不明である。より具体的に示すべきである。	図書委員会は特別教育活動の一環であり、児童生徒の自主的・自発的な活動により、読書活動の推進には大きな動機付けのひとつとなっております。子どもたちが自らアイデアを発揮し、様々な事業に生かすことで、読書活動がより効果的に推進されることが期待されることから、活動の具体化についてもそのアイデアの中から実現するものと考えており、案のとおりいたします。
18	(取組・事業一覧) 中学・高校生期での推進内容はとても寂しい施策であり、高学年になると読書をしないうものが増える傾向に対する対策(施策)になっていない。生徒の自主性に任せるスタンスであるのであれば、生徒参加による図書委員会活動に生徒作成の図書だよりの配布などを追加したらどうか。さらに文書による自己表現の訓練を国語・道徳などの授業に取り入れるべきではないか。	読書離れを防ぐためにも、小学生期に読書を習慣付ける取組を進め、その後の発達段階での読書活動につなげ、また学校や図書館、地域の団体が児童生徒とともに考え行動する中で本と触れ合い、本と親しむ取組に努めてまいりたいと存じます。 いただいたご意見につきましては、読書活動のための具体的な事業実施の中で検討してまいりたいと考えております。
19	(取組・事業一覧) 読書感想文コンクール応募促進は逆効果ではないのか。読書した図書が示しているポイントあるいは読者が重要と感じた事項を数点整理し感想・意見を追記して読書した事実をレポートするようなことの習慣付けのほうが教育視点でより効果的である。さらにこのレポートを生徒間で共有することで読書が加速する。	いただいたご意見は、具体的な事業や取組の方向性を示していると解されますので、子どもの読書活動のための具体的な事業実施の中で検討してまいりたいと考えております。

No.	意見等の概要	市の考え方等
20	<p>(取組・事業一覧)</p> <p>(学校が発行する)図書館便りについて、推奨する図書の紹介に留まるのであればその効果は期待できない。生徒の中でどんな本が読まれているかなどの旬な情報の発行、親へは定量的な読書実態と家庭での工夫点(親も読書をする姿を見せるなど)の紹介などを記載するような施策にしたほうがよい。</p>	<p>学校ももちろんのこと、図書館等から発行する各種の広報誌などにより、各方面から子どもの読書意欲を向上させる工夫をこらした内容の情報提供を行っておりますが、さらに連携を深めていく取組を進めていくことにより読書の楽しさ、大切さを伝えてまいりたいと存じます。</p>
21	<p>(取組・事業一覧)</p> <p>学校図書館における読書環境について、生徒の個性、問題意識、読解力などを踏まえて個人ごとの読書計画を作り、両親と実績の把握を実施し、個人別読書計画のブラッシュアップを行うような運用が効果的であり、さらに必要と考える。そのためには学校司書の設置は必須である。教職員への研修強化と合わせて重要な施策と考える。また図書のデータベース化、分類法による図書整備が記載されているが、読者(生徒)がキーワードで必要図書を用意に探し出せる仕掛け構築のための施策であるならそのように目的を示すべきである。</p>	<p>子どもの読書を支える体制整備を進めていく中で、子どもの発達段階における特性や、それに適した本の情報等についてのスキルアップ、読書活動についての情報交換を行い、学校図書館の読書環境の整備に努めてまいります。</p>
22	<p>(取組・事業一覧)</p> <p>全体的に生徒に直接触れるのは学校でも図書館でもなく、ボランティアなどの他の機関に任せているようなトーンである。学校司書が生徒の読書指導を行う責務を持つこととし、司書増員を施策として明記すべきではないのか。</p>	<p>本計画では学校、図書館も含め、子どもの読書に関わる大人、つまり、地域全体での読書推進を目指しております。</p> <p>小学生期に読書を習慣付ける取組を進め、その後の発達段階での読書活動につなげるためには、学校における朝の読書の充実や、学校司書や読み聞かせボランティア等による本を楽しむ取組を日常的に実施することが、この時期の児童に本の楽しさを知ってもらうきっかけとなることが期待されます。</p> <p>そのため、教育活動の中で読書を推進し、読み聞かせボランティア参加の呼びかけや、計画的な学校司書の配置に努めます。</p>
23	<p>(第5章 計画の効果的な推進に向けて)</p> <p>10年後の目標値が示されるが、著しく低位な数値となっている。特に1か月の間全く本を読まない子どもの割合については中学生、高校生ともに20%以下とするような高い目標とすべきである。いきなり高い目標を設定することが無理な場合、今回提示されている目標値を3～4年後に達成するなど前倒しなどを検討すべきである。</p>	<p>目標につきましては、本計画の中間年におきまして見直しをし、検討を行ってまいりたいと存じます。</p>
24	<p>視力低下の影響回避することについて</p> <p>読書姿勢、読書をしている部屋の照明、図書の文字サイズなどにより近眼を進めてしまうことが多く報告されている。これを回避する家庭における読書環境というよりは読書方法についても改善する施策が必要ではないか。</p>	<p>ご意見につきましては今後の取組を進めていく上で参考とさせていただきます。</p>